
ソース癖、辟易。

ヒノキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ソース癖、辟易。

【Nコード】

N2367H

【作者名】

ヒノキ

【あらすじ】

異常な「ソース癖」のある女性と、それを見守る恋人の短編。

「そんなにソースをかけんなよ。俺の料理が気に食わなくて味を変えているように見える」

はしを口へ運びはじめた数分もしないうちに手製のハンバーグにドボドボと瓶を傾けた私に対し、テーブルを挟む増島くんは辟易の混じった笑みを向けてきた。

「ごめん、つい」と謝ると、「まあ、無意識だもんな」と彼はまだソースの触れていない自分のハンバーグを半分に割って私の皿に寄越してくれた。

食卓において、何にでもオタフクお好みソースをかけてしまうのが私の癖だった。

私を語る上で、オタフクお好みソースのことは欠かせない。テーブルの上に置いてあればはしを持った次に手が伸びるし、置いてなければはしを持つ前に冷蔵庫へ取りに行く。トンカツやハンバーグなどはもちろんのこと、その他の肉、魚、野菜料理全般、ご飯にもかける。

あるとき安かったからお刺身を買って食べることにした。食事の準備で食卓へはしを運んできた私に、突然「血迷ったことはするな」と必死の形相で増島くんが制止してきた。何のことかと思いきや、私は知らずのうちに片手にオタフクお好みソースを握っていた。間一髪、私はお刺身にまでもソースをかけてしまうところだったのだ。

いつから君はそんなにソースをかけるようになったんだ、と以前に増島くんに聞かれたことがある。私のソース癖をさかのぼれば、それは私が小学生の一年のときになる。

といつても、オタフク好みソースに私のはまった直接的な原因は記憶にない。気づくと家庭の夕食で私はソースをたらしまくっていた。小学一年のときの、強烈なエピソードが頭の中に今も根づいているのである。

「一体、どんなことがあったんだ？」と増島くんは身を乗り出した。

「大したことじゃないけど」などと一応前置きをする。「ソースが入ってたの」私はその記憶を話した。「ランドセルの中にね」無意識だった。

ハンバーグを頬張り、白ご飯を口に含む。ゆっくりと咀嚼しながら、前にいる増島くんは満面の笑みを浮かべた。普通、自分の料理したものをこれほどまでおいしそうに食べれるのだろうか。

増島くんの食べっぷりに感心してた私は、自分が食べるのも忘れていた。「さあ、食べよう」とはしを持ち直した私は、そのままソースへ手を伸ばしさつき増島くんに分け与えてもらった純粹なハンバーグにそれをまたドボドボかけてしまった。無意識だった。

「あ」と私は声をもらした。

「おい」と増島くんはまたあの辟易混じりの笑みを私に向けてきた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2367h/>

ソース癪、辟易。

2011年1月26日07時01分発行